

受賞者対談:「マイクロコスモス・マクロコスモスー心と宇宙の連結性」

文化賞 / チームラボ(代表 猪子 寿之) × ノグチ ミエコ(ガラスアーティスト)
コーディネーター / 西村 我尼吾(俳人)

西村: これまでの講演の中で、福田元総理は、安くてよい物を超えるものは何か、リチャード・ボールドウィン教授はAIとRIができないものは何かという、大きな2つの問いを投げかけられたと思います。文化賞のお二人のプレゼンテーションは、その答えにつながるものを示していただくものだと思います。まずノグチさん、お願いいたします。

ノグチ: 約30年、ガラスと向き合いながら活動してきた経験の中で感じた、無機質のガラスと共鳴できる感覚についてお話しします。

私が代表を務めるノグチガラスでは、作家活動、商品制作、イベント企画、ワークショップなど様々な活動をしています。

今回の受賞理由の1つに、インドネシアの自閉症児へのチャリティ活動がありました。自閉症児たちとガラスの破片を使ったアクセサリなどを制作して販売しています。彼らの身体能力は様々なので、一から勉強し、今でも何ができるか模索しています。

次にガラスの制作や素材、それを生かした表現についてご説明します。宇宙が高温から生まれたように、膨らんだり広がったりするガラスの素材自体のさまが、宇宙のイメージとシンクロしたので、自然に、宇宙がテーマとなりました。

自然界への畏れや尊敬の念が、ガラス制作の原動力に

なっています。身近なものを何気なく見るだけでなく、驚きや共感できることが大事だと思っています。

西村: 武道のようなイメージを感じますが、芸術と肉体とは関係があるのでしょうか。

ノグチ: そう感じていただくと嬉しいです。私が最初に宇宙に込めたテーマは、宮本武蔵の五輪書や、空(くう)の世界、禅的な思想でした。ASEANミュージアムへの収蔵作品は、地球から太陽系銀河群、100億光年先まで、マクロな宇宙を俯瞰するような装置になっています。逆に、ミクロの宇宙を表現した作品では、細胞からDNA、原子、原子核、素粒子へと細くなる様子を表しています。ガラス玉を覗くと自分が小さくなったり大きくなったり、全然違う世界を想像できるという装置になっているのです。

制作を長年していると、私がガラスになり、ガラスが自分に近づくようなやり取りがあって、ガラスと宇宙のイメージも重なり、自分も宇宙の一部になったような気持ちも湧いてきます。こうして、国籍・性別・無機物・有機物など、自分と違うものとして分けられている全てのものは、実はつながっていると体感し、マクロの宇宙とミクロの人間が融合するという作品に行き着きました。

ガラス作品は、映像のような情報量がないので、覗き込むことで、俳句のように、小さなキーワードから無限の世界を自分で想像し、

様々なものに共感できるのだと思います。

西村: 我々が主観とは別のものであると認識している客体を素材の中に流動化し、主客統合させながら、自分の意思を客体の中に実現するというお話になったのだと思います。これはAIにはなかなかできない世界だと思いました。次に猪子さん、お願いします。

猪子: チームラボはアートによって人間と自然、自分と世界との新しい関係を模索したいと思っています。2018年、東京にチームラボプラネッツとチームラボボーダレスというアートミュージアムをつくりました。

人々は自分と世界との間に境界があると思いがちですが、本当は、自分の存在は世界の一部であり、世界は自分的一部分なのです。チームラボプラネッツでは、巨大な作品に体ごと没入し、作品と身体境界が曖昧になる体験を通して、自分と世界との関係を考え直すきっかけをつくりたいのです。

豊かな森に行くとき多様な生命の種が、連続的な関係の上に存在しますが、我々も膨大な連続性の上に生きています。しかし、その連続性はあまりに複雑化し、身体で認知できる範囲を超えています。チームラボボーダレスでは、都市の中に、独立した様々なコンセプトの作品が境界なく連続して繋がっている世界をつくり、そこを意思のある身体で探索する体験を通し、自らの身体で世界の連続性を認知し、世界について考える場所にしたかったのです。

また、4年前から、九州の武雄市に古くからある森と古い庭園で「チームラボ かみさまがすまう森」という展覧会を

しています。そこでは、庭園と自然の森との境界は曖昧で、私自身、その中をさまよっているときに、自然と人の営みが長く続いてきた、境界のない連続性の上に自分の存在があることを感じました。自分という存在は、何十億年という圧倒的時間の長さで、永遠に繰り返されてきた生と死の連続性の上にあります。しかし、認知の境界があるので、日常では連続性を自覚することは難しいです。

そこで、長い年月をかけて形づくられた、巨石や洞窟、森そのものの造形を使うことで、時間の連続性に対する認知の境界を越えて行けるのではと考え、チームラボではDigitized Natureというアートプロジェクトを行なっています。非物質的であるデジタル技術によって、自然が自然のままアートになるというプロジェクトです。

このように様々な認知の境界を超えるプロジェクトを行なっていますので、ぜひ機会をつくって作品を見に来てください。

西村: お二人とも永遠というものをビジュアル化し、我々に実感させてくれましたが、それは、人工知能がディープラーニングによって、ビッグデータを処理するという世界をはるかに越えた、まさに人間のみができる、安くてよい物を超えた価値のある何かを創り出す力があります。

ご両者に共通するのは、日本の文化、東洋的な文化の底を流れる本質というものに対する認識を、今のテクノロジーとこのころのみが産み出すことのできる力をもって見事に実現されているということだと思います。アジアコスモポリタン賞の文化賞を、まさに21世紀を引っ張る巨大な2人の芸術家に受賞いただいたことは我々の誇りです。

